

XenosagaI・II - 第二話 襲撃 - Angriff -

アンドリュー：こちら、エグザマイナー1。ターゲットと思われる物体を捕捉した。ヴォークリンデ、照合を頼む。

オペレーター『ーデータ照合完了。物体は 98.667%の確率でターゲットと推定される。

回収作業を開始せよ。』

アンドリュー：エグザマイナー1、了解。

（ー間違いない、ゾハルだ。

だが、オリジナルではない。やはり、エミュレーターかー）

海兵『こちらエグザマイナー2、中佐、申しわけありません、聞き取れませんでした！』

アンドリュー：な、なんでもない。

活動阻止装置[アトラクト・インヒビター]を展開せよ！

海兵『エグザマイナー2、了解。』

『中佐、力場の展開に偏差を確認。原因を調べてみます。』

アンドリュー：少佐、うかつに近づくな！

海兵『これはーなにが原因で、こんな偏りがー！？

う、うわああああっ！』

アンドリュー：（な、なんということだー）

アンドリュー：！！

ーまた、あの時の夢か。

（ゾハル、恐ろしいモノだとは知ってはいたがー

所詮、資料に目を通しただけの付け焼き刃の知識で御し得るモノではなかったということかー

だが、いつまでもあれを、通常空間にさらしておくわけにはいかん）

ーブリッジへ上がるか。

襲 - Angriff - 撃

ブリッジ

@: 主機関、抜き足モードにて稼動中。現宙域離脱予定時刻まで、絶対基準時にて、7時間16分30秒――

アンドリュー: 次のU.M.N. コラムまで7時間36分、それまでゲートジャンプは不可能、か。

@: (また来たよ、あの中佐殿

なんで部外者が堂々とブリッジに出入りしてるんだか――)

@: (おい、聞かれるぞ。 艦隊司令よりも調査隊隊長の方が、指令権は上らしいってんだから、しょうがないさ)

モリヤマ艦長: ーどうした、中佐。次が最後のゲートジャンプだ。もう心配事はなかろう。

@: ここまで来れば、大丈夫ですよ。コラム間は統計的に接触率低いですし。

それに、ここには小惑星も多いですから艦隊を隠すには都合が良いです。

アンドリュー: ふん、気楽なもんだな。奴らを相手に、小惑星など、気休め程度にしかならん。

@: す、すみません。

モリヤマ艦長: 辛辣だな、中佐。なにかあったのかね?

アンドリュー: いえ、別に――

副長: 例の物体を回収してから十日、緊張の連続でしたからね。

通信可能域まで、もう暫くかかりますし中佐のお気持ちもわかります。

モリヤマ艦長: ーふむ。

副長: 艦長、差し支えない範囲でかまわないのですが、教えていただけないでしょうか?

今作戦の当初の目的は、惑星消滅事件の調査及び調査隊の護衛であったはずです。

それが惑星アリアドネの存在した宙域で例の物体を回収した途端、調査は打ち切られ、

任務の様相が一変したように感じられます。一体なんなのですか、あの物体は?

モリヤマ艦長: さて、私にもわからんな。なにしろ、中佐。君の指揮下の調査隊が受けた機密指令だ。

どうかね、好奇心に殺されそうになっている私に、ヒントだけでも与えてはくれんかね?

アンドリュー: ー申しわけありません。

モリヤマ艦長: やれやれ、とりつく島もなし、か。” 奴ら ” もあの物体を狙っているらしいという噂を耳にしたのだがね。

副長: 噂と言え、物体の回収の際、犠牲者が出たとも聞きます。

アンドリュー: それが事実だとしても――

モリヤマ艦長: 我々に知る権利はない、か。

アンドリュー：――申しわけありません。

モリヤマ艦長：そう度々謝る必要はないさ、中佐。もともと、君の調査隊は別の命令系統で動いている。我々に下された命令書にも『当該宙域にて、なんらかの回収物が存在した場合――全ての事象よりもその確保を最優先とす』――と書かれていただけだ。

副長：全ての事象――ですか？

アンドリュー：我々の生命よりも、という意味だ。

副長：――――

モリヤマ艦長：そう脅すな。

まあ、星団連邦政府としても、そのくらい重要な作戦ということなのだろう。
気を引き締めて頼むぞ。

アンドリュー：それよりも艦長、そろそろ物体を艦内に収容する許可をいただけませんか？
いくら危険性があるとはいえ、艦外に曳航する形で確保してからすでに 230 時間――
あらゆる調査は終了したはずです。

モリヤマ艦長：たしかに終了したと聞いているが、正体は不明との結論だ。なにもわかったとは言えんよ。

アンドリュー：ですが、危険性を喚起される材料もまた、見いだせなかったはずです。

モリヤマ艦長：アンドリュー・チェレンコフ中佐！ 私はこの艦の安全な航行に責任が――
いや、君の職責は私のそれに優先されるのだったな、状況によっては――
よかろう、物体の収容を許可する。

アンドリュー：ありがとうございます。

モリヤマ艦長：気にすることはない。たとえ奴らが――グノーシスが物体を狙っているとしても、備えは万全だ。

アンドリュー：A.G.W.S. と百式観測器による、対グノーシス兵器体系ですか――

副長：それだけではありません。

加えて本艦には、”有事の際の切り札”も配備されていますから。

モリヤマ艦長：――その切り札なんだが、その後、状況はどうなっている。

副長：本日、報告データ A-7 の提出が予定されています。

モリヤマ艦長：――A-7 か。実動まであと一つ、ようやくといったところだな。

副長、すまんがウヅキ主任に、報告データが整い次第、艦橋へ上がるよう伝えてくれ。

それと、これまでのデータも提出するように、と――。

副長：了解しました。

アンドリュー：――――

@: 切り札って、まさか――例の戦闘用アンドロイドのことですか？

@: そうだよ、知らなかったのか。

@: ー一本気だったんだ。

@: 当初の予定より、進捗、大分遅れてるって聞いてますけど。

@: 仕方ないさ。二年前の起動試験では人死にもあったそうじゃないか。その分、慎重なんだろう。

@: しかし、アンドロイドとはまたずいぶんアナクロですね。自分は時代小説で読んだことがあるだけですよ。

@: まあ、切り札とは言っても所詮は験体だからな。

あれ一体あったからといってどうなるもんでもないさ。

結局のところ、ヴェクター[あちらさん]もハクつきたいだけなんだろうさ。

懐古趣味の道楽だよ、道楽。

@: コマーシャルモデルだって、配備実績があるとないとじゃ大違いですしね。

アンドリュー: (無知こそ至福の喜びというのがその通りらしいな――)

@: 中佐、あの――なにか？

アンドリュー: なに、羨ましいってことさ。

@: は？

――

シオン: ずいぶん寝ちゃった。みんな、もうデータ処理終わらせてくれたかな。

またあの子[KOS-MOS]が暴走した。エンセフェロンでのシミュレーション上だけど――

これが、二度目――

(ううん、あの時とは違う――あの KOS-MOS はもういない。いまのあの子とは、違う――)

そうですよね、ケビン先輩――)

あの子は、アーキタイプとは違う。私がそのことを、誰よりも知ってる。ちゃんと説明しなくっちゃ！

ヴェクター開発室

アレン: よし、後処理の統合、これで全部だな。

トガシ: ええ、いま出力します。――どうぞ、副主任！

アレン: なんだ、僕におつかいさせようっていうのか？

トガシ: またまたあ、おつかい先は主任のところですよ！

副主任の大事なお仕事、奪うような我々じゃありません。

カロールハジイ：そうそう！

ベッセル：そうそう！

ジョンベル：そうそう！

アレン：ぼ、僕は別に――

トガシ：良かったですね。部屋を訪れる口実ができて。

ついでに食事にでも誘ってみちゃどうです？ こっちは我々でやっときますから。

カロールハジイ：行くときは行かなきゃ！

アレン：そ、そんなんじゃないって言ってるだろう。

ごほん――でもまあ、これはたしかに副主任の仕事だ。じゃ、じゃあ、あちょっと渡してくるよ。

トガシ：がんばってください！

カロールハジイ：がんばってえー！

ベッセル：がんばって！

ジョンベル：が、がんばってください！

――

アレン：まったく、好き放題言ってくれちゃって。僕だって――行けるもんなら、行きたいさ――――

――主任～っ！

シオン：――アレンくん？

アレン：ちょうど今、後処理のデータ、持っていくところだったんですよ。

シオン：わざわざ、持ってきてくれたんだ。さすがアレンくん、気が利くわね。

アレン：はい、一覧も添付しておきましたから、このまま、ブリッジに提出できますよ。

シオン：ありがとう、助かった。そうだ、アレンくん――さっきのことも、ありがとね。

アレン：あ、いえ、こっちこそすみません。新人にも前もって知らせておくべきでした。

ただ、彼らの気持ちも理解してやってください。

たしかに KOS-MOS への不安は完全に払拭されてはいないけど各自万全を尽くして取り組んでいます。

みんな早く、その目で見たいんですよ。

自分たちが成し遂げようとしているものを――その点は僕も同じです。

シオン：わかってる。でも――やっぱり私は――

アレン：主任、やっぱり”あの件”が――

シオン：えっ？

――ああ、そうか、そうなんだ。

アレン：どうしました？

シオン：ごめん、アレンくんが考えてるのはちょっと違うんだけど――ううん、なんでもないの、忘れて。

さ、はやくブリッジに提出しなくちゃ。

アレン：主任――

あ、しまった！ 仕事終わったら、食事誘おうと思ったのに～～

――

マーグリズ『――失態だな、アンドリュー。回収には細心の注意を払えと、前もって忠告しておいたはずだ。

ゾハルがいかに危険な存在であるかも含めて――』

アンドリュー：はい、機関員に犠牲が出たことについては、弁明の余地はありません。ですが、我々も――

マーグリズ『些末な事象など、どうでもよい。問題なのは、ゾハルに人が直接接触し、”消えた”こと――そして、その後
なんの処置も施さず、通常空間に晒した状態で移送していることだ。

お陰で計画を2フェイズ、繰り上げねばならなくなった。

エミュレーターとはいえ、最後のゾハルを星団連邦政府なぞに渡すわけにはいかんからな。』

アンドリュー：2フェイズも、ですか！？ 何故そのような――

マーグリズ『こちらのEPRレーダーがU.M.N.の局所変移を捉えた。

コラムを跳躍する形で貴様らの艦隊に接近している。接触予測時間は5時間と22分後だ。』

アンドリュー：まさか――グノーシス！？

マーグリズ『だから失態だと言った！ 1時間前に増援部隊を差し向けた。それまでの間、なんとしても保たせろ。』

アンドリュー：ま、間に合うのですか？

マーグリズ『”保たせろ”と言っている。状況によっては、単体でハイパースペースに送り込んでもかまわん。

幸いにして、貴様の艦には”例の兵器”が搭載されている。

ヴェクターの目的は判らんが、この際だ。利用出来るものなら――』

アンドリュー：お、お言葉ですが、あれはまだ実動試験にさえ移っていないのです。危険すぎます！

マーグリズ『あれの力は良く知っているだろう。二年前に殺されかけた記憶、まだ癒えてはいまい。』

アンドリュー：で、ですが――

マーグリズ『――以上だ。』

アンドリュー：お待ちください、司令！ マーグリズ司令っ！！

ブリッジ

シオン：以上が、本日までに実装を決定された機能の概要となります。

モリヤマ艦長：――なるほど、大体の機能と武装は了解しました。

アンドリュー：艦長、例の兵器の稼動データ、そろそろ届いたのではありませんか？

モリヤマ艦長：ああ、ちょうどいいところに来た。

ウヅキ主任、こちらが惑星消滅事件の調査隊を指揮するアンドリュー・チェレンコフ中佐だ。

（――もっとも、本来の任務は、あの物体の回収だったらしいがな）

シオン：ヴェクター・インダストリー第一開発局のシオン・ウヅキです。

モリヤマ艦長：KOS-MOSの開発室主任を勤めていらっしゃる。

アンドリュー：――資料を拝見しましょう。

――なんですか、これは！ 肝心の実動データは！

シオン：そちらの方はまだ――本日はA-7までになります。

アンドリュー：ないとおっしゃるの？

シオン：はい、近々に模擬戦用躯体を使って実動試験に移る予定ですが、何分システムが不安定で――

アンドリュー：それは言い訳でしょう。あなた――ウヅキ主任でしたか？

あなた方は一体何のためにこの艦に乗っているのか、そののところを良く考えていただきたい！

シオン：は、はい――

アンドリュー：いいですか、一旦軍艦に乗ったらそこは研究室ではない、戦場なのです。

その戦場で尖兵たるKOS-MOSが未だ起き上がりすらないというのはどういうことですか！

寝たきりの兵器に存在意義はない。兵器は稼動してこそ意義あるものとなるのです！ そののところを――

モリヤマ艦長：よさんか、中佐！

我々が急遽編成された艦隊なのと同様、彼等もまた急遽開発を進めざるを得ない状況なんだ。

それに実動試験まであと一つ。何事もなくこの作戦が終了できれば、それに越したことはない。違うかね？

アンドリュー：――――

艦長がそうおっしゃるなら――

（何事もなく――だと？ そんな甘い期待は、あと5時間で打ち破られるのだ！）

モリヤマ艦長：なにか言ったかね、中佐？

アンドリュー：いえ、なにも――

モリヤマ艦長：ところでウヅキ主任。

シオン：は、はい――

モリヤマ艦長：埋め合わせと言ってはなんだが、ひとつ頼まれてもらえないかね？

シオン：为什么呢？

モリヤマ艦長：そのオペレーターシート、空席があるだろう。そこは本来、百式が座っているはずなのだ。

シオン：百式観測器――対グノーシス用に調整されたレアリエンですね？

モリヤマ艦長：ああ、それがどうも機能不全を起こしているようでね。うちのメンテスタッフが困ってるんだ。

シオン：カスパーゼ大尉が？――あ！

モリヤマ艦長：そう慌てなくてもいい。

あなたが勤務時間外に大尉の仕事を手伝ってくれていることは、報告を受けている。

よかったら、今日も行ってみてくださらんかね？

シオン：艦長がそう言うてくださるなら――わかりました、百式の話し相手になってきますね。

モリヤマ艦長：ああ、頼んだよ。きっと我々軍人よりは、あなたのような方が適任だろう。

格納庫

少佐：たるんどるぞ、貴様らぁ！ 貴様も貴様も貴様も！ たるんどるっ！！

いいか、そのたるみが先の事故を招いたことを思い知れ！

だがな、六根懺悔の暇など貴様らにはないのだ！ いや、この俺が与えん！

いいか、後悔している暇があったら己に活を入れろ！

考えている暇があったら体を動かせ！ 自分に考える脳があると思うなっ！

マシンと化せ！ マシンの如く不眠不休で作業を続けるのだ！

たるんどると言っころーがあっ！

シオン：うちとは、正反対の所もあるのね――

@：まだ残ってたのかい？ 無理して体壊しちゃ、なんにもなんないぞ。

シオン：明朝までにどうしても纏めておきたいデータがあったものですから――

ケビン先輩こそ、こんな時間までどうされたんです？

ケビン：――悩み事があってね、中々寝付けないんだ。

シオン：悩み事？

ケビン：明日、いよいよ KOS-MOS が目覚める。その姿を見るのはとても楽しみなんだけど、目覚めた彼女に
なんて声をかけたらいいかーそれで悩んでいてね、おかしいだろう。

シオン：おはようーでいいじゃないですか。

ケビン：おはようーか。

シオン：朝起きたらやっぱり、おはようですよ。

ケビン：そうかー” そうだった” ね。ありがとう、これでぐっすり眠れそうだよ。

シオン：よかったですね。

ケビン：君も早めに休んでおくんだぞ。

シオン：はい。

ケビン：じゃ、おやすみ。

シオン：ーおやすみなさい。

シオン：（あれが二年前ー二人でかわした、最後の言葉だった）
（そうだよね、みんなもケビン先輩と同じ。早く KOS-MOS を見たいよね）

え？

あれはー

あなたはー

???：――

シオン：え、なにー？

作業員：危ないっ！

少佐：たるんどるのか、貴様ぁ！ 関係者以外はこいつに近づくなと聞いておらんのか！

もう三人も消えているんだぞっ！ 失せろ、貴様のようなちゃらちゃらした奴にうろつかれると、兵士がたるむ！

シオン：す、すみませんー！

少佐：どこの阿呆だ、この艦に民間人を乗せたのはっ！

ーなにをボケッと見ておるか、貴様！

たるんどるぞおっ！ 貴様も！ 貴様もだっ！！

ー

シオン：そうだ、百式のメンテ頼まれてたんだ。調整室に行かないとー

レアリエン調整室

シオン：どうも、ヴェクターです。

カスパーゼ大尉：ああ、ウヅキさん。すみません、いつもいつも――

シオン：いいんですよ、大尉。レアリエンのみんなには、いつも元気でいて欲しいですから。

シオン：あなた、アレックスね。

アレックス：はい、エンセフェロンではご迷惑をおかけしました。

シオン：そんなことないわよ。それより――拒絶信号出てるわね。

カスパーゼ大尉：メンテナンスの専任スタッフが足りなくて、機能不全を起こしている個体が絶えないんです。

シオン：人間だって、長期間の航海はストレスたまるんですもの。人工の生命だって、同じですよ。彼――

行為主と行為主体との関係――特に自他の差異性を認知する部分の調整が、曖昧になってます。

カスパーゼ大尉：はあ――

シオン：少し補正したけど、どう？

アレックス：適切な表現は困難ですが――なにかつかえがとれたようです。

周囲の風景も明るくなったように感じます。ありがとうございます。

シオン：うん、なら大丈夫ね。

シオン：初めまして、私はシオン・ウヅキ。ヴェクター・インダストリー第一開発局の技術者よ。

そっか、百式レアリエンって、女の子だったのよね。実際に会うのは、初めてだけど。

百式：――――

シオン：艦長から、あなたの話し相手になってくれって頼まれちゃった。

たしかに、あの艦長さんや副長さんじゃあなたの悩み事を聞いてあげるなんて、できそうにないものね。

百式：――別に、悩み事なんて。

シオン：そうかな、私なんて話し相手がいないとそれだけで悩み事になっちゃうけど。

今はね、職場に話しやすい相手がたくさんいるけど、昔は大変だったんだ。

若年寄りたいな兄さんと二人暮らしで、いつも、わけわからない古いことわざとか使われてたんだから――

あ、ごめんね。自分のことばかり。

百式：（兄弟――――）

シオン：あなた、お名前は？

百式：百式観測器・製造番号 1005、固有名称はありません。

この艦に配備されている観測用レアリエンは私だけだから――

シオン：名前は、区別する必要だけのためにあるものじゃないわ。

ね、じゃあ、あなたの名前、私がつけてもいい？

百式：え、でも、命名権は所有者の――私の場合は、星団連邦軍が――

シオン：そうね、正式名称は無理かもしれない。でも、お友達を呼ぶ愛称なら、別にかまわないんじゃない？

――アイってどう？ ちょっと変かな。

百式：――――

ううん、変――じゃない。

シオン：よかった、じゃあこれから、私だけはアイって呼ぶわね。よろしくね、アイ。

百式：――――うん。

シオン：一応調整しておきましたけど、戻ったら一度、本社三局まで連絡してください。

そちらで本格的なカウンセリングを受けられた方が良いでしょう。

カスパーゼ大尉：わかりました。しかし、凄いですね。

KOS-MOS の OS 開発だけでなくレアリエンのメンタルケアまでおできになるなんて――

専門のカウンセラーでもなかなか難しいと聞きますが。

シオン：そんな――全部”上司”からの受け売りですよ。私一人じゃ、何もできません。

それに、ホントは私三局[こっち]志望だったんです。

実は、今の仕事が終わったら、転属願いだそうかなって思ってるんですよ。

カスパーゼ大尉：ヴェクター第一開発局は、エリート中のエリート集団と聞いてます。

それなのに転属希望なんですか？

シオン：ええ、家族からも、なんでお前みたいなのが、一局に配属されるんだ。

きっと手続きミスかなんかに違いない――ってよく言われてますし、自分でもそう思います。

それに――彼らのこと、もっとよく知りたいんですよ。

バージル：そんな連中のことを知ったところで、どうなるもんでもなかろう？

シオン：あなたは――バージル中尉！

これはメンテナンスなんかじゃ――

バージル：臭いだ――

シオン：えっ？

バージル：臭いだよ、この嗅覚神経にこびり付くような、膾えた臭い。なあ、あんたも感じないか？

吐き気をもよおさせる、この臭いだ。

シオン：な、なにを――

カスパーゼ大尉：いい加減にしないかっ、少佐から事前に指示はあっただろう。

今回の作戦は、A.G.W.S.とレアリエンの相互支援も目的としているんじゃないかったのか？

それをお前は――！

バージル：相互支援だあ？ こいつらとかあ？

へっ、グノーシス相手に実戦で仕える保証も無い、戦闘用レアリエンとの相互支援なんぞ、俺は願い下げだぜ。

シオン：あの――お言葉ですけど、彼ら戦闘用レアリエンは優秀な兵士――

バージル：彼らあ！？ たかが”備品”を人間扱いかい。

シオン：あ、それ問題発言ですよ。彼らにも私たち同様、知性も感情も備わっています。

それにレアリエンの基本的人権は4763年に制定されたミルチア憲章で謳われているはずですよ。

バージル：お為ごかし、反吐が出るぜ！ いくら人道主義を気どったところで、ヴェクター[おまえさんたち]にとっちゃ、備品は備品だろうに。いやあ、”商品”か。

シオン：私たちは、彼らを備品扱いも商品扱いもしません！

バージル：ならなぜ”戦闘用”だの”観測用”だの分類分け[カテゴライズ]がされているんだ？

それこそ、商品扱いしている証だろう。なにを言ったところで所詮は戦の道具。それに知ってるぜ――

ヴェクター[おまえさんたち]は商品管理用の緊急制御コードを、こいつらに仕込んでるってな。

シオン：そ、それは――

カスパーゼ大尉：バージル！

バージル：なんだ、お前？

アレックス：中尉の仰る通り、たしかに我々は商品として製造され、そのための教育を施されました。

ですが、私は今のこの仕事に、誇りを持っています。

それは誰に強制されたものでもない、私自身の意志なのです。

百式：――自分の意志――

バージル：――自由意志ってか。まあいい、せいぜい今を享受しておけ。

そのうちわかる時が来る、この俺のようにな――

――ぐふっ。

カスパーゼ大尉：お前、まだ中毒が――。ほら、この薬を持ってはやく待機所に戻れ。

バージル：――ああ、もらうもんもらや、こんなところに用はねえよ。

シオン：バージル中尉、まさかーDME 中毒？

カスパーゼ大尉：いろいろありましてね。昔はあんな奴じゃなかったんですが、ちょっとしたことがきっかけでーね。

シオン：お知り合いーなんですか？

カスパーゼ大尉：あいつとは士官学校の同期でね。以来、腐れ縁って奴ですよ。ーミルチアです。

シオン：そう、ですか。それでー

カスパーゼ大尉：ミルチアでかつてなにがあったか、お若いのにご存知でしたか？

ーいや、そうですね。三局志望なら、知ってて当然ですね。

シオン：私ー故郷がミルチアなんです。

カスパーゼ大尉：え！？

シオン：ミルチア紛争が勃発したとき、八歳でした。

戦後、主星が第二ミルチアに遷都したとき、私たちもそちらに移って

ーいまは、兄が独りで住んでます。

カスパーゼ大尉：そうでしたか、すみません。もう帰れない故郷を思いださせてしまって。

シオン：いえ、いいんです。私たちにとって忘れてはならないことから。

ーそれに、誰も近づけなくなったとはいえ、旧ミルチアが消滅したわけじゃありませんし。

私いつか、またあの惑星に還る日がくるーそんな気がするんです。

カスパーゼ大尉：そうーですか。

シオン：ごめんね、イヤなところ見せちゃって。でも、あんな人ばかりじゃないのよ。

百式：いえ。ー任務に戻ります。

カスパーゼ大尉：これはー第三級非常警報？

ヴェクター開発室

アレン：な、ななな、なんだぁ！

トガシ：非常警報ですよ、これ。ブリッジに問い合わせてみます！

アレン：頼む！ーKOS-MOSはどうなってる！

ジョンベル：ー問題ありません。

まあ、主任でなければ軌道させられないんですから、当たり前ですけどー

アレン：――そうか。

（そうだよな、KOS-MOS が勝手に起動したのは、あの事故のときだけだ

この非常警報は、KOS-MOS とはなんの関係もはい。いや、あってたまるか――）

トガシ：――副主任、ブリッジとつながりません。これ――おかしいですよ。

いや、ブリッジに問題があるわけではなく、この開発室が情報的に孤立しているような――

ジョンベル：ああっ！

アレン：今度はどうした！

ジョンベル：――KOS-MOS が！

ブリッジ

モリヤマ艦長：警戒信号の原因は特定できんのか？

副長：まさか、グノーシス――

オペレーター：ありえませんが、先の定時観測でも百式はなにも異状を検知しませんでした。

エラーじゃないんでしょうか？

モリヤマ艦長：違う、なにかが起きているのは、たしかだ――――

オペレーター：艦長、本艦外域を対象とした警戒信号ではないようです！

モリヤマ艦長：ならばどこから――艦内か！

オペレーター：――異常源、特定できました！ 本艦内第三区画――

これは――KOS-MOS です！

ヴェクター開発室

アレン：そんな馬鹿な――おいっ、一体どうなってる！

ジョンベル：わかりません、あまりに突然すぎて――現在確認作業中です！

トガシ：KOS-MOS 警戒態勢レベル 1！ ビンディング解除、くそっ勝手に立ち上げを始めたぞ――

ジョンベル：こちらでもカウントダウン入りました！

アレン：どういうことなんだ、なんで急に――――

レアリエン調整室

シオン：KOS-MOS がカウントダウン――嘘でしょ！？

カスパーゼ大尉：どういうことです？

シオン：いま、開発室に確認してみます。

『――現在、エマージェンシーレベル3が進行中。

本回線はクラスA、およびクラスBのユーザーに優先的に割り当てられます。

クラスC、Dの方は後ほどおかけ直してください。』

カスパーゼ大尉：レベル3？　なんだってそんな！

シオン：まさか、誰かが勝手にKOS-MOSを――ありえないわ、KOS-MOSは私が起動コードを打ち込まない限り、絶対に目醒めないようにしてあるもの。こんなこと――こんなこと――二度とあるはずないのに――！
今度はなに！？

百式：――第一種非常警報！

シオン：待って、私も行くわ！

ブリッジ

モリヤマ艦長：今度は何事だ、第一級だぞ！

@：前方空間に大規模な空間歪曲を探知、大質量体がゲートアウトしてきます！

モリヤマ艦長：馬鹿な、まだコラム有効領域の外だぞ、そんなはずは――！

@：U.M.N.のジオデシック構造体が強制置換されています！

対象は何らかの方法を使って、U.M.N.に干渉している模様！

モリヤマ艦長：ハッキングだとでもいうのか、まさか――！

@：重力偏差甚大です、時空間に不連続面が発生しています！

@：馬鹿な、ロジック的には非可逆なんだぞ！

@：質量算出中――質量解の一致なしです！ 明確な数値が出ません！ 質量――極めて大！！
波高が――――！

@：お、おい、これじゃあまるで、津波じゃないか！

@：質量予測値増大、通常空間に実数化します！　――艦長！

@：艦長！

@：艦長！！

副長：艦長っ！

@: 正面、来ます！

モリヤマ艦長: グノーシスかぁっ！

ヴェクター開発室

アレン: 起動、止められないのか！？

ジョンベル: 無理です、制御受け付けません！

トガシ: KOS-MOS の起動、外部からの制御じゃありません、自律モードです！

アレン: 自律モードは凍結済みだぞ、主任の端末からでないと解除できないはずだ——
くそっ、なんだって——

ベッセル: 副主任、たいへんです！

アレン: 後にしろ、こっち以上にたいへんなことがあるか！

ベッセル: 同じくらいたいへんです！ 艦隊の前方に——
グノーシス郡が出現！

アレン: なんだってええっ！
おい、主任は！

トガシ: こっちへ向かっていると思うんですが——U.N.P. の通常帯が輻輳を起こしていて、連絡とれません！

アレン: 非常帯は！

ベッセル: いま、呼び出してます！

アレン: まさか主任が起動させたわけじゃあるまいし——
————！！

グノーシスに反応してるのかっ！？

ジョンベル: だめです、最終ピンディング解除！ KOS-MOS、起動します！

KOS-MOS: ——シオンが、呼んでいます。